

Title	「朗詠江註」の発端
Sub Title	The start "Roei Gochu"
Author	佐藤, 道生(Sato, Michio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.1 (2006. 12) ,p.45- 63
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関場武教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910001-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「朗詠江註」の発端

佐藤 道生

はじめに

『和漢朗詠集』はその内容の豊かさも然ることながら、撰者藤原公任の知識人としての權威も与って、その成立直後から大いに流布した。その盛行に拍車をかけたのが『和漢朗詠集』の多種多様な註釈書、所謂朗詠註の存在である。『和漢朗詠集』は朗詠註と相まって後代のあらゆる分野の文学作品に大きな影響を与えたのである。朗詠註を通してみた『和漢朗詠集』の文学的世界には汲めど尽きせぬ魅力があると言っても言い過ぎではない。

数多ある朗詠註の中で、その最初に位置するのが大江匡房（一〇四一—一一一一）による「朗詠江註」である。これは書籍の形態を取らず、『和漢朗詠集』写本に書入れのかたちで存在する。本稿では、「朗詠江註」書入れの存する暦応二年（一三三九）藤原師英書写本⁽¹⁾を取り上げ、主としてその詩題・文題注記を検討することによって、大江匡房による『和漢朗詠集』研究の始発点を瞥見することにした。

曆応二年書写本には、詳密に施された訓点を除けば (一)「朗詠江註」、(二)集付け(出典注記)、(三)詩題・文題、(四)裏書といった凡そ四種類の書入れが見出される。但し、この本は転写を経ているので、書入れと言っても、全て本文と同筆である。(一)「朗詠江註」は本文の行間・欄上などの余白に小字で書き入れられている。(二)欄上の集付けは、「万」(『万葉集』)、「古」(『古今和歌集』)、「拾」(『拾遺和歌集』)、「千」(『千載佳句』)などと略記される。『千載佳句』については小字で「春興」「晩夏」などの部門名も記される。稀に「五言」と詩体を記すこともある。(三)詩題・文題を書入れと見なすことについては少しばかり説明が必要であろう。『和漢朗詠集』には成立時期からそれほど隔たらない平安中期の写本が複数現存している。それらの書式は主題(朗詠題)にしたがつて摘句を置き、その下に小字で作者名を記すだけの、至つて素朴なものである。これが撰者藤原公任の採用した書式であった。それがこの本では摘句の殆ど全てに詩題・文題が作者名と並んで注記されている。これは詩題・文題が公任以後に書き入れられたことを示しているよう。(四)裏書は「朗詠江註」とは異なる書入れであり、内容は詩語の典拠・用例を明らかにすることに主眼を置いた註釈である。これについては別に考察を加えたことがあるので、ここでは触れない。

これらの中、裏書を除く三種の書入れは何れも匡房によつて為されたものであると考えられる。「朗詠江註」が匡房によるものであることは言うまでもない。藤原師英の書写奥書に「朱墨並びに勘物等を付け了んぬ」とあり、この「勘物」が本奥書に言う「故大府卿、匡時朝臣の為に勘付せらるるの文」に当たると考えられるので、「朗詠江註」は匡房が二男匡時(後の維順)のために記したものであると知られる。一方、集付けと詩題・文題注記とは、『今鏡』(もみ

じのみかり)に見える、白河天皇が匡房に下命して『和漢朗詠集』摘句の全文を集めさせたことと関連がある。

又からくへの歌をもてあそばせ給へり。朗詠集に入りたる詩ののこりの句を、四韻ながらたづね具せさせ給ふこともおぼしめしよりて、匡房の中納言なむ集められ侍りける。

「詩ののこりの句を、四韻ながら」とあることからすれば、律詩の摘句に限って全文を集めさせたと解釈できようが、そうではあるまい。詩体に関わりなく摘句全てにわたって探索させたと見るのが自然である。命を受けた匡房は諸書を尋ねて摘句の全文を集め、浄書して天皇に奉ったことであろう(その書は現存しない)。詩題・文題と出典注記とはその作業の過程において判明した言わば副産物であり、匡房はそれらを自ら所持する『和漢朗詠集』写本に書き入れたものと思われる。

このように匡房による書入れの中、「朗詠江註」は匡房が息子のために著したものであり、集付けと詩題・文題注記とは、匡房が白河の下命によって摘句の全文を探す過程で記されたものである。書入れの時期が異なることは注意すべき点である。³⁾

二

次に、集付け、詩題・文題注記の書入れ作業の実態を更に掘り下げるために、匡房が具体的にどのような手順を踏んで摘句の全文を探し出したのかを推測してみることしよう。ここでは便宜上、書中最多の入集を果たしている白居易

の摘句を組上に上せて考察を加えることにしたい。

『和漢朗詠集』に収める白居易(作者注記に「白」とある)の摘句を朗詠題と作品番号(新潮古典集成『和漢朗詠集』に拠る)とによって示せば次の如くである。括弧内には『白氏文集』(那波本)の巻次を漢数字で、作品番号を算用数字で示した。「×」は『白氏文集』に存しないことを表す。また、摘句が我が国に現存する『白氏文集』の古写本(後述する唐鈔本系本文を有する)中に存する場合には、『白氏文集』の作品番号の後に該当する古写本を略記した⁽⁵⁾。略号は次のとおり。長——酒井氏蔵『白氏長慶集』巻二十二、金——金澤文庫本、管——内閣文庫蔵『管見抄』、神——神田喜一郎氏旧蔵『白氏文集』(巻三、四)。

卷上——立春 4-5 (五十八・2874・管) 早春 10 (十七・1020・金) 春興 18 (十三・0616・長管) 20 (五十六・2648・管) 春夜 27 (十三・0633・長管) 三月尽 50 (五十一・2240・管) 51 (五十八・2829・管) 52 (十三・0631・長管) 鶯 66 (六十七・3352) 67 (十八・1159・管) 霞 75 (六十四・3109) 梅 87 (十八・1157・管) 柳 102 (五十八・2903・管) 103 (六十六・3314) 104 (十七・1108・金管) 105 (十七・1108) 花 114 (六十四・3115) 115 (六十六・3244・管) 落花 126 (五十七・2799) 127 (六十六・3253・管) 藤 133 (十六・0990・長) 躑躅 137 (十六・0941) 更衣 144 (六十七・3360) 首夏 147 (十七・1055・金) 夏夜 150 (二十・1374・管) 151 (十九・1280・管) 納涼 159 (六十六・3264) 160 (五十一・2298・金) 161 (十五・0852) 晚夏 168 (六十八・3462・金) 橘花 171 (二十・1361) 蓮 175 (十三・0636) 176 (十六・0943) 蟬 192 (四・0145・管神) 扇 199 (六十五・3211・金) 立秋 204 (十九・1242・管) 早秋 208 (五十七・2744) 1

209 (五十五・2529) 七夕 212 (×・3767) 秋興 221 (十四・0715・金管) 222 (十五・0882) 223 (十四・0790・金管) 秋晚 230 (十三・0704・管) 秋夜 233 (三・0131) 234 (十一・0596・金管) 235 (十五・0860・管) 十五夜 242 (十四・0724・長金) 243 (六十五・3182・金) 月 252 (十六・0993) 254 (十八・1142・管) 菊 266 (六十七・3382・管) 蘭 286 (六十七・3384) 槿 291 (十五・0897・管) 紅葉 301 (十三・0620) 302 (五十四・2443・金) 落葉 308 (六十八・3471・金) 309 (十二・0684) 虫 327 (十四・0754・金) 328 (六十六・3287) 露 338 (十九・1291・管) 霧 341 (十六・0911) 擣衣 345 (十九・1287・管) 初冬 352 (十一・1386) 冬夜 356 (六十九・3561・管) 歲暮 359 (十六・0913) 爐火 362 (六十四・3053) 霜 367 (十五・0887) 雪 375 (五十三・2322・管) 376 (六十六・3294) 春水 387 (六十七・3350) 仏名 393 (六十八・3432・金)。

卷上——曉 419 (十四・0723・金) 松 421 (五十五・2528・管) 竹 430 (五十六・2636) 草 435 (五十三・2332・管) 鶴 445 (十六・0941) 446 (六十八・3463・金) 猿 455 (十八・1142・管) 456 (十五・0878・管) 管絃 463 (三・0141・神) 464 (五十四・2467・金管) 文調 471 (五十一・2217・管) 酒 480 (六十一・2938・管) 481 (十七・1030・金) 482 (十八・1142・管) 483 (五十六・2631) 484 (五十六・2691) 山 492 (十三・0644) 山水 501 (十六・0999) 水 511 (三・0137・神) 512 (十六・0948・長) 513 (五十七・2787) 禁中 521 (×・3766) 522 (十四・0737・金) 故宮 531 (六十四・3098) 仙家 541 (十七・1019・金) 山家 554 (十六・0978・長管) 555 (十七・1079・金管) 田家 565 (五十三・2331) 隣家 572 (十五・0812) 573 (十五・0812) 山寺 578 (趙嘏の作) 579 (五十四・2498・金) 仏事 588 (七十・3608・管) 589 (五十七・

2804・管) 閑居 613 (六十一・2942・管) 616 (五十七・2749・管) 617 (六十六・3248・管) 618 (十六・0979・長管) 眺望 624 (二十・1378) 饒別 631 (五十七・2751) 帝王 655 (四・0146・管神) 656 (六十四・3113) 親王 666 (四・0152・神) 丞相 676 (五十六・2623) 刺史 689 (六十四・3109) 王昭君 697 (十四・0805・金管) 妓女 707 (四・0164・神) 708 (×・3769) 老人 722 (十五・0888・管) 723 (五十八・2911・管) 724 (十八・1112) 交友 733 (五十五・2565・管) 734 (五十三・2317・管) 懷旧 740 (五十一・2216・管) 741 (六十四・3079・管) 742 (十七・1107・金管) 743 (五十七・2726) 述懷 753 (五十七・2715・管) 755 (十七・1064・金管) 慶賀 765 (十六・0945・長) 恋 777 (三・0134・管神) 779-781 (十二・0596・金管) 無常 791 (五十六・2677・管)。

『和漢朗詠集』に収められる白居易の摘句は合計百三十六首(右に掲げた百三十七首中、一首(578)は別人の作)である。匡房はこれらの摘句の全文を探し出すに当たって、恐らく『千載佳句』を利用したのであろう。大江維時撰『千載佳句』は主として唐代の詩人の摘句千八十三首を収めた秀句選で、藤原公任が『和漢朗詠集』を編纂するに当たって重要な依拠資料とした書である。白居易の摘句百三十六首中、七割に当たる九十六首が『千載佳句』に見え、しかも『千載佳句』には全ての摘句に詩題注記が施されている。また朗詠題と『千載佳句』の部門とは共通するものが多い。したがって、匡房が取った方法は、『和漢朗詠集』の摘句を『千載佳句』中に見出し、その詩題注記を手懸かりとして『白氏文集』中の所在を突き止め、全文を書き抜く、という手順であったと思われる。写本に見られる集付けの「千」とその部門名とは、首尾よく摘句を『千載佳句』中に見出した際に書き入れたものであろう。それでは、詩題注記も『千載

佳句』から書き抜いたものであるかという点、そうではない。『千載佳句』と重複する詩句九十六首について、両者の詩題注記を比較してみよう。『和漢朗詠集』の作品番号、詩題注記、『千載佳句』（括弧に括って千と略記する）の部門・作品番号、詩題注記の順に掲げる。『千載佳句』の詩題注記を「○」とするのは『和漢朗詠集』の詩題注記との異同がないことを示す。

- 45 府西池。(千)立春 122 ○。
10 春生。(千)早春 8 ○。
18 酬寄〔寄〕は「哥」の誤写〕舒大見贈。(千)春宴 695 酬哥舒大見贈。
20 送令孤尚書赴東都留守。(千)春興 42 ○。
27 春中與盧四周諒華陽觀同居。(千)春夜 82 春中與盧四周諒(華陽觀同居)〔括弧内は後代の加筆〕。
51 酬皇甫賓客。(千)送春 112 ○。
52 三月三十日題慈恩寺。(千)115 三月三十日。
66 和思黯題雨莊見示兼呈夢得。(千)春興 51 和思黯題雨莊見示。
67 春江。(千)春遊 853 ○。
75 〔詩題注記無し〕。(千)春興 50 早春。
87 春至。(千)梅柳 606 ○。
102 天宮閣早春。(千)春興 46 ○。

- 104' 題峽中石上。(千)春興 38' ○。
- 114' 早春招張賓客。(千)春興 49' 早春。
- 115' 尋花題諸家林園。(千)雜花 664' 尋春題諸家園林。
- 127' 與李賓郊外同遊贈之。(千)春遊 856' 春來與李甘郊外同遊。
- 133' 酬三月三十日慈恩寺相憶見寄。(千)送春 115' 三月三十日。
- 137' [詩題注記無し]。(千)早秋 149' 題元十八溪居。
- 144' 早夏晚興贈夢得。(千)首夏 120' 早夏晚興。
- 147' 薔薇正開春開 [「開」は「酒」の誤写] 初熟。(千)首夏 119' 薔薇正開春酒初熟。
- 150' 江樓夕望招客。(千)夏夜 130' ○。
- 151' 早夏閑齋獨居。(千)風月 269' 早夏朝歸閑齋獨處。
- 159' 池上逐涼。(千)納涼 139' ○。
- 160' 池上夜憶。(千)晚夏 141' 池上夜境。
- 161' 苦熱題恒寂師房(禪室) [「禪室」は「房」の異本注記]。(千)避暑 133' 苦熱題恒寂師禪室。
- 168' 夏日遊永安水亭。(千)夏興 126' 和楊尚書夏日遊永安水亭。
- 171' 西湖晚歸望孤山寺贈諸客。(千)秋興 179' 西湖晚歸迥望孤山寺。
- 175' 泉西郊秋寄贈馬造。(千)秋興 167' 泉西郊秋。
- 176' 階下蓮。(千)蓮 651' ○。

- 204^r 立秋日登樂遊園。(千)立秋 144^r 立秋日。
 208^r 答蘇六。(千)早秋 148^r ○。
 209^r 秘省後序。(千)早秋 150^r ○。
 212^r 七夕。(千)七夕 247^r ○。
 221^r 題仙遊寺。(千)詩酒 799^r ○。
 222^r 於黃鶴宴罷望。(千)秋興 164^r 黃鶴樓宴。
 223^r 暮立。(千)秋興 177^r ○。
 230^r 題李十一東亭。(千)早秋 146^r ○。
 234^r 長恨歌。(千)秋夜 186^r ○。
 242^r 八月十五夜禁中獨直對月寄元九。(千)十五夜 251^r 八月十五夜禁中對月寄元九。
 243^r 八月十五夜同諸客翫月。(千)十五夜 252^r 八月十五夜。
 254^r 送蕭處士遊黔南。(千)送別 912^r ○。
 266^r 九月八日酬皇甫十見贈。(千)菊 657^r 九月一(八イ)日〔「八イ」は「一」の異本注記〕。
 286^r 杪秋獨夜。(千)蘭菊 659^r 杪秋。
 301^r 秋雨中贈元九。(千)暮秋 201^r ○。
 302^r 泛大湖書事寄微之。(千)初冬 215^r 泛大湖。
 308^r 早入皇城贈王留守僕射。(千)秋興 162^r 早入皇城。

- 309 晚秋閑居。(千) 暮秋 199° ○。
- 328 答夢得秋庭独坐見贈。(千) 暮秋 202° ○。
- 338 暮江吟。(千) 暮秋 197° ○。
- 341 庚樓曉望。(千) 春曉 79° ○。
- 356 (和季中丞_イ有) 山居雪夜作。(千) 雪夜 302° 山居雪夜。
- 359 江樓宴別。(千) 冬夜 224° ○。
- 362 感〔感〕は「戲」の誤写〕招諸客。(千) 冬夜 228° 戲招諸客。
- 367 歲晚旅望。(千) 冬興 217° ○。
- 375 雪中即事寄微之。(千) 雪 290° 雪中即事。
- 376 訓令公雪中見贈。(千) 雪 293° ○。
- 387 早春憶遊思黔〔黔〕は「黯」の誤写〕南莊因寄長句。(千) 早春 14° 早春。
- 419 禁中夜雪作。(千) 曉 307° 禁中夜雪作書與元九。
- 421 新昌閑居。(千) 幽居 1014° ○。
- 430 和令孤相公栽竹。(千) 竹 629° 竹。
- 435 春憶微之。(千) 春興 41° 早春詞。
- 445 題元十八溪居。(千) 山居 993° ○。
- 446 在家出家。(千) 幽居 1016° ○。

- 455' 送蕭処士遊黔南。(千) 行旅 946' 送蕭処士遊黔中。
- 456' 舟夜贈內。(千) 水行 960' 舟夜贈內詩。
- 482' 送蕭処士。(千) 詩酒 800' 送蕭処士遊黔南。
- 484' 琴酒。(千) 醉 825' ○。
- 492' 遊雲居寺。(千) 山居 990' ○。
- 501' 登西樓。(千) 眺望 874' 登西樓憶行簡。
- 511' 昆明春水滿。(千) 春興 36' ○。
- 512' 送客入「入」に「之」と傍記」湖南。(千) 水行 959' 送客之湖南。
- 513' 送劉郎中。(千) 水行 962' 送劉郎中赴任蘇州。
- 521' 題東北旧院小亭。(千) 早秋 151' 禁中 549' 聞裴李一舍人拜綸閣。
- 522' 八月十五夜懷禁中清業「業」は「景」の誤写」。(千) 月 259' 八月十五夜聞崔員外对酒翫月懷禁中清景。
- 531' 題于家公主旧宅。(千) 旧宅 570' ○。
- 554' 香爐峯ト山居。(千) 山居 991' 香爐峯ト新ト山居。
- 565' 春題湖上。(千) 春興 45' ○。
- 572' 與元八ト隣。(千) 隣家 568' ○
- 616' 不出時「時」に「門」と傍記」。(千) 閑居 454' 不出門。
- 617' 老來生計。(千) 幽居 1015' ○。

- 624^r 江樓晚眺。(千) 眺望 872^o ○ 「眺」に「望イ」と傍記」。
- 631^r 臨都駅送崔十八。(千) 餞別 928^r 送崔十八。
- 656^r 池上閑吟。(千) 閑適 483^o ○。
- 676^r 宿裴司空池亭。(千) 丞相 351^r 宿裴司空相公池亭詩。
- 689^r 〔詩題注記無し〕。(千) 刺史 367^r 早春憶劉蘇州(詩イ)。
- 708^r 別後寄美人。(千) 美女 441^r 春詞。
- 723^r 睡覺。(千) 老病 547^o ○。
- 724^r 贈康叟。(千) 老人 541^r ○。
- 733^r 寄殷協律。(千) 憶友 423^o ○。
- 734^r 〔詩題注記無し〕。(千) 文友 418^r 張十八員外以新詩見寄。
- 742^r 贈微之十七韻。(千) 感歎 517^r 遇微〔「微」は「微」の誤写〕之。
- 743^r 問江南物。(千) 懷旧 526^o ○。
- 753^r 詠懷。(千) 感歎 520^o ○。
- 755^r 醉吟。(千) 醉 824^r ○。
- 765^r 夜宿江浦。(千) 朋友 411^r 夜宿江浦聞元八改官因寄此什。

九十六首中、『和漢朗詠集』の詩題注記と『千載佳句』の詩題注記とが一致しないのは四十五首、一致するのは五十

一首である。尚、18・147・362・512・616の五首において両者が一致しないのは単なる誤写に因つてのことであるから、これらは一致する方に含めた。

この数値だけから判断しても『和漢朗詠集』の詩題注記が『千載佳句』のそれに拠つたものではないことは明らかである。『千載佳句』の詩題注記は出典である『白氏文集』の詩題をそのまま記すのではなく、概して簡略化して記す傾向が認められる。例えば、右の中の27(82)・52(115)・114(49)・133(115)・144(120)・171(179)・175(167)・204(144)・242(251)・243(252)・266(657)・286(659)・302(215)・308(162)・375(290)・387(14)・631(928)(括弧内は『千載佳句』の作品番号)の詩題注記について、『千載佳句』では『白氏文集』の詩題の一部分を載せるに止めているのである。これに対して、『和漢朗詠集』暦応二年写本では『白氏文集』の詩題をほぼそのまま載せている。したがって、『和漢朗詠集』の詩題注記は『千載佳句』のそれに拠つたのではなく、『白氏文集』に拠つたことが明らかである。また、両者の詩題注記が一致する五十一首について見ても、『白氏文集』の詩題も亦これに一致することから、『和漢朗詠集』の詩題注記は『白氏文集』に拠つたものと考えられるのである。

二

前節の考察によつて、匡房が白居易の摘句の全文を突き止めるに当たつて、『千載佳句』に入集しているものについては、『千載佳句』の詩題注記を手懸かりとして『白氏文集』に溯り、『白氏文集』の詩題を『和漢朗詠集』に書き入れたことが明らかになった。それでは、匡房の用いた『白氏文集』はどのような本文を有したのであろうか。この点を何故問題とするかといえ、当時行なわれていた『白氏文集』の本文にやや複雑な様相の存したことが想定されるか

らである。

『白氏文集』が我が国に将来されたのは平安前期、仁明天皇の承和年間（八三四―八四八）のことであった。²⁷これ以後、我が国に流布する『白氏文集』の本文はこの時伝えられた唐鈔本系統の本文である。一方、中国では北宋初め（十世紀末）に『白氏文集』は大胆な校訂が加えられて刊行され、この後宋刊本系本文は漸次唐鈔本系本文を駆逐して行く。我が国でも平安中期一条朝には、『白氏文集』の宋刊本が将来され、時の権力者藤原道長はこれを手に入れていた（『御堂関白記』寛弘七年（一〇一〇）十一月二十八日条、長和二年（一〇一三）九月十四日条）。『白氏文集』の宋刊本は伝来の当初は、唐鈔本に固執する儒家がこれを容易に受け入れようとせず、またその稀少性もあつてか詩人の机上に置かれることはなかつたようだが、平安末期以降、次第に用いられるようになったと思われる。そのことを示すのが金澤文庫本に見られる校合注である。金澤文庫本『白氏文集』は鎌倉前期、寛喜から建長にかけての時期に豊原奉重が中心となって書写校合したもので、多くの巻に「摺本」（宋刊本）との本文異同が書き入れられている。これによってこの時点で唐鈔本系本文と新渡の宋刊本系本文との間に著しい本文異同の存することが周知のこととなつていたことが知られる。それでは溯つて、大江匡房は『白氏文集』の宋刊本を手にしていただろうか。また『白氏文集』に二つの対立する本文が併存していることに気づいていたのであろうか。

因みに『通憲入道藏書目録』の第百五櫃に『白氏文集』の書名が見られる。これは七帙から成り（第二帙欠。第一帙は二帖欠か）、一帙十帖で、第七帙のみ十一帖であった。したがって、匡房に六十年ほど後れる藤原通憲（一一〇六一―一五九）は七十一巻から成る胡蝶装の宋刊本を所持していたことが知られる（唐鈔本系古写本は七十巻で装訂は卷子装）。それでは、『和漢朗詠集』暦応二年書写本の詩題注記を『白氏文集』の二つの系統の本文と比較してみよう。ここで

は唐鈔本系本文として金澤文庫本、酒井氏藏『白氏長慶集』卷二十一、内閣文庫藏『管見抄』⁸を用い、宋刊本系本文として元和四年（一六一八）那波活所刊古活字版を用いることにする。詩題から本文系統が明らかになるのは次の四例である。『和漢朗詠集』の詩題注記、『白氏文集』唐鈔本系本文の詩題、『白氏文集』宋刊本系本文の詩題の順に掲げた。『○』は『和漢朗詠集』に一致することを示す。

20 送令孤尚書赴東都留守。（管見抄）○。（那波本）送東都留守令孤尚書赴任。

160 池上夜憶。（金澤文庫本）○。（那波本）池上夜境。

242 八月十五夜禁中直對月寄元九。（酒井氏藏本・金澤文庫本）○。（那波本）八月十五夜禁中直對月憶元九。

741 微之敦詩晦叔相次薨逝歸然自傷也二絶内。（管見抄）微之敦詩晦叔相次薨逝歸然自傷因成二絶。（那波本）微之敦詩晦叔相次長逝歸然自傷因成二絶、又一首。

何れも『和漢朗詠集』の詩題注記が唐鈔本系本文に拠っていることを示している（734は「薨逝」と「長逝」との本文異同によって判断した）。すなわち匡房が詩題注記に用いた『白氏文集』は父祖伝来の唐鈔本系本文を持った古写本だったのである。しかし、匡房が宋刊本を見ていなかったのかといえ、そうではない。というのは白居易の摘句百三十六首中、五十三首の詩題注記には、その下に「二四」、「七六」のように二桁の数字が書き入れられている。これはその摘句の『白氏文集』中の所在を示したものであるが、その意味するところは「二四」が第二帙の第四帖（卷十四）、「七六」が第七帙の第六帖（卷六十六）ということであり、この数字の書入れに用いられた『白氏文集』は卷子装の写

本でなく、胡蝶装の宋刊本なのである。これは匡房が唐鈔本系の古写本ばかりでなく、宋刊本を見ていたことを意味している。

それでは、「朗詠江註」に『白氏文集』の本文系統に関する言及は見られるのだろうか。次に掲げるのは巻下、酒に収める白居易の摘句（483）である。

茶能散悶為功浅、萱導忘憂得力微。鏡換杯／白

（茶は能く悶りを散ずれども功を為すこと浅し、萱は憂へを忘ると導へども力を得ること微なり。鏡を杯に換ふ。白。）

これには作者名の下に、

檢文集、微字多為遲。

（『文集』を検するに、「微」字は多く「遲」為り。）

と書入れがある。この「江註」は『白氏文集』を調べたところ、「微」を「遲」に作る本文が多い^⑤の意であり、「微」と「遲」との本文対立を問題にしている。那波本は「遲」に作り、これが宋刊本系本文である。しかしこの巻には古写本が現存しないので、「微」が果たして唐鈔本系本文であるのかは分からない。したがって、この「江註」は匡房がた

しかに『和漢朗詠集』と『白氏文集』との本文異同に気づき、これについて注意を喚起したものはあるが、『白氏文集』の本文系統を視野に入れてこれを問題としたものであるのかは不明とせざるを得ないのである。

「江註」には右の例以外に白詩の本文異同に触れた記事は見当たらないが、「江註」に十五年ほど後れる『江談抄』にはそれに関する匡房の発言が見出される。『江談抄』は匡房晩年の言談を藤原実兼（一〇八五—一一二二）が筆録したものである。そこで匡房は自作の「法勝寺常行堂供養願文」（『江都督納言願文集』卷二）中の「斜谷之鈴」の語を説明した後、『和漢朗詠集』卷下、恋（779）に収める白居易「長恨歌」の摘句「夜雨聞猿斷腸声」（夜の雨に猿を聞けば腸を断つ声）に触れて、

猿字可改鈴字。件事昔所披見也云々。

（猿の字は鈴の字に改む可し。件の事は昔披見せし所なり、と云々。）

と語っている（醍醐寺藏本、類聚本卷六46）。この詩句に於いて「猿（或いは猿）」に作るのには『和漢朗詠集』、『白氏文集』の唐鈔本系本文（金澤文庫本、『管見抄』）であり、一方「鈴」に作るのには那波本を始めとする『白氏文集』の宋刊本系本文である。匡房の言う「昔」とは白河天皇の下命を受けて摘句の全文を探索した時のことであり、その時、宋刊本を「披見」してこの本文異同に気づいたのであろう。古写本と宋刊本との本文対立について知識のない実兼は「然者文集僻事歟、又伝写之誤歟。（然らば文集は僻事か、又たは伝写の誤りか）」と匡房に問うたが、匡房はそれ以上詳しくは答えなかつたという。

以上の考察から、匡房が『白氏文集』の古写本（唐鈔本系本文）と宋刊本との本文対立に気づいていたこと、また、その認識が摘句の全文を探索する過程で得られたものであることが明らかになったことと思う。しかしながら、匡房が唐鈔本と宋刊本との本文対立をどのように捉えていたのかは必ずしも明らかではない。わずかに『江談抄』の記述から、漠然と宋刊本の本文の方が優位であると考えていたことが分かるくらいである。ここでは本文校勘資料として『白氏文集』の宋刊本を用いることが大江匡房に始まることを指摘するに止めて、本稿を終えることにしたい。

1 注

個人蔵（三河・鳳来寺等覚院旧蔵）。卷子装二軸。曆応二年（二三三九）藤原師英写。表紙、藍色絹地牡丹唐草雲文様、卷上下ともに二十九・一糎×二十五・四糎。内題、「和漢朗詠集上（下）」。料紙、斐楮交漉き。無界。一紙の大きさ、二十九・二×五十五・六糎。字面高さ、二十四・二糎。墨付け、卷上、三十一紙（第一紙は祝部希烈揮毫の書）。卷下、三十五紙（第三十四紙は菅原以長の識語、第三十五紙は祝部希烈の識語）。奥書、卷上末尾（第三十一紙）「曆応二年太簇十三日書写之了。累代秘本／雖在之、空置辺鄙、舒卷不容易。為授少生等、／乘閑暇重写之而已。／式部権少輔藤原師英。／同十四日墨点裏書等終功了。（師英花押）／同日朱点了。（師英花押）」。卷下末尾（第三十二紙、第三十三紙）「本奥書云、／建長四年四月十一日、上下御読畢。去年十二月九日御書始。自／同十一日御書始有御読。三品光兼卿、藏人佐資定等、追雖召／加御侍読、一身連日候御読、兩卷早速畢。令並黃軒之幼聡、／不堪丹府之感悦者也。／翰林主人菅へ在判／長成也」／故江太府卿、為匡時朝臣被勸付之文也云々。／每詩歌所々ゆ、しうよき云々。雖不知由緒所注付也。／校点故李部大卿敦光朝臣家本、黄色点、是也云々。（以上、本奥書）／曆応二年綺節八日書写之了。累冢之本／数部、雖有之、空入置辺鄙文庫、不能用下序之／兼用之間、為擊童蒙、重励愚筆而已。／式部権少輔藤原師英。／同日付朱墨并勸物等了（師英花押）。

2

拙稿『和漢朗詠集』、幼学書への道』、『和漢比較文学』第三十六号、二〇〇六年二月、和漢比較文学会）を参照されたい。

3 詩題・文題注記が「朗詠江註」に先行すること、二〇〇六年度説話文学会大会（六月十八日、京都府・佛教大学）口頭発表「朗詠江註」と古本系「江談抄」で述べた。同題の拙稿（『説話文学研究』第四十二号、二〇〇七年七月刊行予定、説話文学会）を参照されたい。

4 『和漢朗詠集』に作者を白居易とするもので、『白氏文集』に見えない詩句は三首（212・521・708）。何れも『千載佳句』に収める。但し521の詩題注記が「題東北旧院小亭」であるのに対して『千載佳句』のそれは「聞裴李二舍人拜繪閣」、708が「別後寄美人」であるのに対して『千載佳句』は「春詞」と両者は大きく異なる。

5 『白氏文集』の作品番号、古写本の存否については花房英樹『白氏文集の批判的研究』（一九六〇年、彙文堂）所収の「綜合作品表」に従った。

6 『千載佳句』の作品番号は金子彦二郎『増補平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇』（一九五五年、培風館）所収の『千載佳句』校定本に従った。本文は歴史民俗博物館蔵（鎌倉期）写本（『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書』文学篇第二十一巻、二〇〇一年、臨川書店）に拠り、同本の欠落部分（春興 39、50）は金子氏校定本文に拠った。太田晶二郎『白氏詩文の渡来について』（『太田晶二郎著作集』第一冊、一九九一年、吉川弘文館。初出は一九五六年六月）を参照されたい。

7 内閣文庫蔵『管見抄』。永仁三年（一二九五）写。『白氏文集』の抜萃。十巻中、巻三を欠く。四手の寄合書き。巻四・五・八・十の本文（傍訓、ヲコト点を除く）は宮内庁書陵部蔵永仁五年写『古文孝経』、杏雨書屋蔵（鎌倉後期）写『老子道德経』（河上公章句、存卷上残簡）等と同筆で、書写者は『古文孝経』奥書に拠れば「宋銭塘無字老叟呉三郎入道」である。尚、『新撰古筆名葉集』大燈国師の項の「佐保切」、「道德経切」は右の『古文孝経』、『老子道德経』から切り出された断簡である。

8 この摘句は『千載佳句』（酒798）の詩題注記の下に「発句云」として引かれ、「遅」に作る。『千載佳句』の拠った『白氏文集』は唐鈔本系本文であるから、ここは本文系統に拘わらず『白氏文集』は「遅」に作り、「微」は朗詠に於ける本文改変であると見なすのが穏当であろう。

9 『朗詠江註』が寛治年間（二〇八七—一〇九四）後半の成立であり、『江談抄』の筆録が嘉承二年（一一〇七）頃から天永二年（一一一一）にかけての時期に行なわれたこと、注3の口頭発表で述べた。